



中里恒子全集

中里恒子全集 第八卷

定価二〇〇〇円

昭和五十五年三月十五日印刷

昭和五十五年三月二十五日発行

著 者 中里恒子

発行者 高梨 茂

印刷者 青木 勇

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ八ノ七

電話(五六二)五九二一

振替東京二一三四

検印廃止

©一九八〇

目次

天使の季節

鎖

衣服

遠い虹

あとがき

解題

3

227

291

343

393

394

天使の季節

1

駅前の花屋のウインドには、南国の植物が茂っていた。ゴムの木、フェニックス、アジアンタム、……日光までが青くみえる。宇田川正夫は、先刻からウインドの前に立っていた。時時、駅の方を見た。

正夫の姉の浦乃から、小さい子を三人連れて来るといふ知らせがあった。一時頃には、大森駅へ着くというのである。正夫は、ぶらりとその迎いに出たが、二十分も前に駅前へ来た。なにか歩きまわっていたかったのだ。そしてやっと、花屋の前で、茂った青い葉に見入りながら、ううべの結婚式でも、花嫁の白いふくやかな胸に、繊細なあおい葉をつけた花が抱かれていたのを思い出した。

ううべ結婚式をあげたのは、正夫の建築事務所の親しい友人で、大学の先輩だ。花嫁は恩師の令嬢である。在学中から音楽のグルーブでいっしょになり、三年越しの愛情がみのったのだが、正夫は、友人をチャンスに恵まれたひとりと思っている。……正夫自身、母からも、姉からも、

そろそろ時節到来とすすめられながら、まだ、心をゆすぶられるような女性に出會わないのだ。

晴れた休日の往来を、若い女が何人も通りすぎる。美しい女もいる。はっとするほど美しいひとが歩いてゆく。……だが、正夫にとっては路傍の花だ。白いセーターにスラックス姿の若いひとが、ともに陽を浴びて汗ばみながら、自信あり気に歩き歩き、正夫の方をじろじろ見るので、正夫は眼をそらした。若い女のその眼つきは、獲物を物色する鳥のように光っていた。

突然、正夫の立っているウインドの前に、白い顔がうつった。白髪に眼鏡の顔と並んでうつった。

「あら、あったかそうね、あの葉っぱ……ヴェランダにおくといいわね、」

「お前は、なんでもヴェランダに置きたがる、カナリヤも、犬のジュンも、机も、わたしの寢椅子も、食卓も……」

「あの植木鉢をおけば、もっと家庭的になってよ、でも千七百八十円もするのね……」

「要らん要らん……だが仲なかいね、」

二つの顔は、ついとその場を離れていった。その間、正夫は、その父と娘らしい會話を、きき耳たててきいていた。硝子にうつった白い顔に魅惑されたからだ。ちらっと見ただけなのに、正夫には、全部を見た気がするほど、気品が感じられた。ガラスの魔術だろうか。

「……正おじちゃん、おじちゃま……」

正夫は、いきなり、小さな温かい手につかまえられた。姉とその子供たちであった。

「いやだわ、ポカンとして……さあバスの方へゆきましょう、これ持ってね……」

姉は大荷物をつたすことで、正夫を空想の世界から呼び戻した。

「……なんて晴れてるんだろう、冬の晴天で、清潔だなあ……」

「全くまあちゃんときたら、俗っ気がなさすぎるって、みんな言ってるのよ、たまにはいいオーヴァだとか、どこの売子は美人だとか、人間くさいことを言うものよ、」

「いやいや美人はちゃんと見てるよ……」

「あらそう、耳よりだわ、みつかったの？」

浦乃の話し方は現実的で、正夫は閉口していた。今日のことは、今日すぐ喋べりたい慾望家で、眼のこし、聞きのがし、ということがない。だから正夫も、

「ああ見つかったよ……」

「どこで？ 會社？ 電車のなか？」

「ショウ・ウインドの前で……」

「まあいやだ、そんな漠然としたの、それで、あとでもつけたの？」

「そんな品の悪いことはしないよ、それっきりさ……」

「あらそれっきり？ なあんだ、それじゃあ話にならないわ……ほらほら、バスがきましたよ、まさおじちゃんにつかまりなさい、」

どかどかと、乗客のなかへまぎれ込んで、正夫の胸のどこかに、ウインドのなかの白い顔がうつっていた。バスが揺れる度に、その顔は、あおい繊細な葉のかげで千七百八十円もすると言

っていた。正夫は口のなかで、思わず千七百八十円と言ってみた。ウインドの前で、若い男の見たる前で、千七百八十円もするということズバズバ言えるのは、相当大胆のような気がした。そして正夫は、その大胆なところが気に入っていた。……正夫は、ウインドの中の顔を、はっきり思い出そうとしていた。だが、確たる形ではなく、思い出されるのは、柔らかな感じ、気品のある面影……全く、漠然と眼の前に漂うような、冬の風のような、とりすがるよすがのないまぼろしだけであった。

茨木ふく子は、二ヶ月前に二十三歳の誕生を迎えた。父親の一作とふたり暮しである。戦災で動産のことごとくを焼失して、乏しい間借生活の間に、妻は出ていった。羽振りのいい男と関係を生じ、良人の一作も、娘のふく子も捨てていったのである。——それからまる八年経っている。

茨木一作は、現在では製油會社の常務として、安定した生活を送っているが、二年前に、ようやく家を新築し、ふく子も大学を出た。一作は、そのうち、ふく子も結婚させなければ、と考えることがある。なにかその考えは億劫で気がすすまないのだ。妻のいない家の主婦代りというのではないが、妻との間に交わすことの出来なかった一種のいたわり、情感というものが、娘とは成立し得た。娘ではあるが、若い女の気配からこの青春の埋み火のような情熱が、時折一作の生活をかきたてる。

「あたし、あしたの晩はお招かれよ……やっぱり着物の方がいいでしょう……」

箆笛をあげ乍ら、ふく子は、ヴェランダの一作に相談している。

「……どこへゆくのだ……」

「まあいやだわ、柳井かず子さんのパアティよ、こんど御婚約をなさったし、お母さまの手術の経過がよくて退院なさったし、それやこれやめでたいというお氣持なんでしょう……」

「ふうん、パアティか、なにかと理窟づけて集まるんだね、あそこの家は……」

「柳井さんのフィアンセ、ネジを作る工場の息子さんですって……あたし、たかがネジなんてと思っていたら、ネジの製作所としては有名なメーカーで、益益有望なんですって……」

「ふうん、もう何人ぐらいきまったかね、お前の悪友たちは……」

「え？ 約半分よ、グルウプの——中にはもう離婚したひともいてよ、そして、またゆく計画をたててらっしゃるわ、」

「それはそうだろう、一ぺんでこりごりというほどショックはないだろうな、この頃は、」

「この頃でなくても、そのくらい積極的に生きるひと好きだわ、人生が二度あるようでしょうね……」

「なんだ、まるで何度でも結婚する方がいいみたい……そこが人生の微妙なところさ、ひとの出會うということが運命みたいなものだからね、」

「そうでしょう、だから出會うためには、どこへでも出かけなければね……」

「いや、そんなものじゃない、社交とは違うものだ、出歩きまわり、チャンスを探しまわって

るひとをみると、衰れを誘うね、男には掘出しものをしたがる癖があるんだよ、すばらしい女を夢みてるのさ……」

「お父さまはそうかもしれないけど、うちの台所とヴェランダを往復しては、世のなかの誰にもぶつからないわ、柳井かず子さんも、田川さんも外出好きで、どこへでも顔をお出しになつてたわ、だから恋愛が始まったのよ、」

一作は、着物に帯をあわせているふく子を、横からじっと見ていた。娘が父親に向って、恋をしたいと訴えているのだ。おかしいことだ。だが、一作を、ほっとさせた。

「……パーティにお洒落をしてゆく、そして誰かに眼をつけられる、そこでロマンスが始まる、と思つているうちが花だ、せいぜいめかしてゆきなさい……」

「失礼だわ、それほど子供に思つてらっしゃるなんて、あたし、警告してるのよ、いきなり何かが起つて、お父さまが血圧をあげるようなことのないように——」

「そうかい……お前は知らないんだよ、なにかが起るときは、予告なしだ、わたしを安心させて、それから恋をしようなんてことは、先ず不可能だと思ひなさい、」

ふく子は黙つて、衣類をひとまとめにした。わかつてる。そんなこと。……ふく子は、母親の恋愛事件をあとからきいた。父親にはそう言えば、どこかもの足りないものがある。それは、癖のない、淡泊な性格であり、良識であつた。かっかつと燃える火のようなファイトのない、澄んだ沼のように、ふく子は沈んだ空気に耐えられないときがあつた。ふく子は、その後母親がどういう暮しをしているか知らない。だが、時には、そんな思い切つたことをした母親を畏怖するよ

うな、羨望するような気が湧くのだった。

「でもね……かずさんが言うのよ、柳井さんのパパ、よく女のひとと問題起すんですって、それでお家ではいざこざが絶えないんですって——でも、お母さまに冷淡というのではないのですって、むしろとてもよくなさるのですって……ふく子なんか、誰か好きになれば、それだけでいいわ……」

「そういうことは、当事者だけにわかることで、批評の限りではないね……」

「そうね……あっちもこっちも、うまくまるめこむのは、それはそれなりの力量だと思うわ、」
ふく子が笑いながらそう言うと、一作は、ふっと口辺をひくひく震わせて、

「……ひとりさえ、まるめられないものもいるからね……さて、風呂を先にしようか、」

「はい、……やっぱりお友達がきまったりすると、ちょっと動揺を感じるわ、」

「いい傾向だよ……」

一作は立ちあがった。ふく子もお盆を持って、

「お父さま、面白がってらっしゃるの……」

「うん、まあゆっくり話そう……」

父親のあとから、ふく子は台所へ——スープがいい匂いをたてていた。手傳いのすみさんは、せつせと大根をおろしている。

「お嬢さま、お隣の猫がまた仔を生んだそうですよ、いったい一年に何度生むんですかね、全く生み放題ですからね……」

「いいわよ猫のことなんか……あんだ、あとで電池買いにいつてね、忘れないでね……」

ふく子の心は、小さな電池のこととはべつに、この間偶然柳井家で紹介されたかず子の叔父の野瀬に、明日のパァティでまた會えるだろうという期待で落着かなかった。……その日、柳井家をふたりはいっしょに辞した。

夕闇の高輪の坂を下りながら、

「こんど、いつお會い出来ます?」

いきなり言われて、ふく子は、相手の顔をみた。「明日でもいいな、僕の方は……」

ふく子は、なんて獨断的なひとかと臆面なさがおかしかった。

「あなたはよくても、あたしはよくないわ、」

そう言い捨てて、怒ったように走ってきたタクシーに手をあげると、あとを見向きもせず車に乗った。——だが、明日はきつと、野瀬も招ばれているに違いない。ふく子は、どうしてもそのひとに會いたいのだ。そのためにだけ、明日は出席する氣でいるのだった。噂通りの「へんな奴」と思いながら、會いたいのである。

柳井家では、洋間から芝生の庭にテーブルが作られていた。冬晴れの日光が、遅咲きの薔薇の花びらを光らせているほかは、庭の樹樹は憂鬱に茂っている。

木の下鉄の椅子に、ふく子は野瀬と向いあっていた。三年も前から、此處にこうしているよ

うであった。野瀬は、柳井かず子達のそばで、焼とりの串を持って、ハーモニカを吹くように、串の肉をくわえていた。

「……あ、茨木さんようこそ、」

ひとりですっと近づいて来たふく子に向って、柳井家の人びとがすぐグルウブにひき入れた。

ふく子は、かず子の婚約者が、かず子より背が低いのに、はじめて気づいた。そのそばで、野瀬の長身は目立った。グレイの濃い背広も、ずっと年長の野瀬の浅ぐろい顔を生き生きさせている。

「茨木さん、庭の方にとってもおいしい牡蠣があるんですよ、ゆきましよう、」

野瀬は、すぐふく子の腕をとった。自然で、いかにも無邪気にみえた。ふく子は、かず子たちに笑顔を残しながら、野瀬について鉄の椅子のある樹蔭に来てしまった。

牡蠣などはそばになかった。近くのテーブルには、色彩あざやかなカナッペが、まるで花壇のように並んでいた。

「……あたしくし牡蠣の方へゆきたいわ、それに椅子が必要なほどくたびれてませんわ、」

「僕は嘘はつかない……牡蠣は恐らく売切れたんでしよう、またお替りが出ますよ、歩いた方がよければあっちへゆきましよう、あなたは、いわゆるひと眼というものを気になさるんだな……」

野瀬は、無遠慮にそう言って、隣りのテーブルから、ナフキンを取ってふく子にわたした。

「なにかおあがんなさい、」

「そうね、おいしそうなの取って……」

ふく子は、すらすらと命ずるように言った。野瀬は、無表情に手を伸し、エビ、イクラ、卵、

サラダ、焼肉などをふく子のナフキンの上に乗せた。そして、自分もその中から一つつまんだ。ふく子には、その野瀬の快活な態度が、野生の動物のように機敏で新鮮だった。およそ、今までふく子の出會った男とは違っていた。まるで、ふく子をはじめから無視しているようで、しかもふく子のしたいことをさせた。

「おかしいでしょう、あの隅に牛乳が壘ごとあたたためてある……」

ふく子は、言われるままにそっちへ歩いた。湯気の立った籠の桶のなかに、牛乳壘が並んでいる。

「……親友のひとりにM牛乳のやり手がいって、牛乳を寄附したんだそうだ、飲みたいひとは、その場でキャップを取るようにと主張して、あんな駅売りみたいなことになったんですよ……」

「無駄が出ないでしょう、」

「凡て見栄のいらぬ現代ですからね、実質がありゃあいいんだ、」

「それでもないわ、ただ、生きてりゃあいいものではないし、牛乳はまあ、飲めばいいとしても……」

「賛成です、あなたは哲学をもってる、かず子が、かねて異彩だと話してくれましたが、」

野瀬は、つかつかとミルクの壘をとって、ストローを挿し、さあ、とふく子へ差し出した。立ったまま、ふく子はすいすいと牛乳を吸った。誰も牛乳のそばにはいず、小さな赤いグラスをもって、広い洋間を右往左往していた。

「……明日はお眼にかかれませんか……」